7月の行事報告 *July*

7月30日(土) 中原寺ファミリーパーティー　午後2時/開演

猛暑真っ只中の7月30日に、3年ぶりの中原寺ファミリーパーティーは行われました。

当日は聞法会館に100名弱の老若男女が集まり、楽しいひと時を過ごしました。

住職のご挨拶からパーティーが始まり、まず「キャベツおばさん」による映像紙芝居のミニ公演を鑑賞いたしました。「うんちしたのはだれよ?」「カレーライスプレートの手遊び」等の3つの公演でした。

紙芝居だけでなく、デジタルで作られて素敵な映像がプロジェクターから大きなスクリーンに投影され、その世界観に魅入りました。

特筆すべきは、ナレーターによる小気味よいテンポ、登場するモグラ・ウサギ・ヤギ・ウシ・ハエ等のキャラクターに合った声優の声音、更に最高なのは場面に合った素敵なピアノ伴奏。それぞれの役割が絶妙、そして心地良くにマッチして、とても素敵な公演でした。

続いては、講談師である神田伊織さんの講談を二題観る事ができました。一つ目は、第2次世界大戦下にリトアニア領事代理として、多くのユダヤ人の命を救った杉原千畝(すぎはらちゅう)を題材にした現代講談の新作、二つ目は夏の定番である怪談、壇ノ浦の戦いで敗れた平家のやんごとなき方々の亡霊に憑りつかれた「耳なし芳一」のお話でした。

伊織さんの巧みな話術と動きから、会場にいる全員がその場に自分がいるような感覚となり、とても不思議な臨場感でした。

最後は皆でビンゴ大会。ビンゴ大会が初めての年配?の皆様も共に楽しめました。また、閉会後には聞法会館駐車場に出店のキッチンカーより美味なかき氷を堪能し、ひと夏の良い思い出を皆様と共に経験をする事ができました。

ご住職・坊守さんはじめ、企画し会場の準備などでお手伝いくださった壮年会・婦人会の皆様に改めて感謝申し上げます。

また最後に、危険な暑さに鑑み、恒例の模擬店や盆踊り等を中止するというご英断により、来場者だけなくスタッフも安全に楽しめました。誠にありがとうございました。

（星野 修一郎記）

7月の行事報告 *July* 壮年会法座「御文章を味わう解説1回目報告」

「出家発心章」（一帖第二通）　7月10日(日)午後3時

親鸞聖人のみ教えでは、出家も棄欲も菩提心も必要ではなく、ただ一心に如来の仰せに従う他力の信心の定まることこそが大切で、そこには老若男女や重罪の有無などの区別はありません。この信を得た位は、浄土に往生することが定まる正定衆であることを経典や論釈で引用し、「死」によってのみ救いが定まる生き方から、「生」も「死」も支える念仏の救いの生き方を解き示す。更に、親鸞聖人のご和讃を引用して、「阿弥陀如来の浄土に往生しようと願う衆生は、すべからく二心なく如来の本願を信ずべきこと(「信心正因」の義)」、その上での称名念仏は、「称名報恩」の義であることを示しています。

特に注目するところは、下記に示すように衆生の実情に寄り添っているところで、衆生はよろこびと安心感をもって御文章に応えていったと思われます。

・ほとんどの衆生が、読み書きが出来ないことに配慮していること。

・全ての人々が等しく救われること。差別のない世を求める衆生、とりわけ女人禁制等差別を受けている女性にとっては、この上ない朗報。

住職から、「出家発心」について以下の解説がありました。「発心」は「発菩提心(菩提心を発す)」のことで、仏道の出発点でもある。菩提心の内容は、四つの弘誓願(全ての菩薩が修行のはじめに起こす四つの願い)で構成されており、その精神は「究極の自利利他」を表す。

更に、[ご同朋の社会をめざす運動(実践運動)]の推進文に触れ、①仏教を学ぶ意義、②自他共に心豊かに生きることの出来る社会像などの問いかけがありました。

最後に、

・阿弥陀様の心を聞いていく中で他者を思いやる心を醸成する。

・自分のできる範囲で自利利他を実践していく。

などのコメントがありました。

今回も、意義深く新鮮な法座を頂きました。合掌

（児島 佳守 記）

感話 シリーズ-34

「第32回 文化講演会で感じたこと」

令和4年10月22日(土)午後1時半　山崎製パン企業年金会館 3階

時代は暗い迷路をさまよいつつある。そのような中、中原寺恒例の「文化講演会」はコロナ禍もあって3年ぶりの開催となった。テーマは「利他と他力」で、コロナ禍やウクライナ・ロシア紛争など、命や生活の根幹に係わる諸問題の渦中にある日常にあって適宜なお話であった。

講師の中島岳志先生は、政治学者で東工大リベラル・アーツ研究院教授としてご活躍で、受賞作『中村屋のボース』など多数の著書を出されている。先生は仏教徒としてではなく、政治学者の視点で今日の社会には「利他と他力」の考えが有用とのことで、ご自身の多くの実体験や先達の見識をもとに分りやすくお話しいただいた。

日々の生活では、自分第一、まず自分を守り自己責任が常識となっており、「利他」のような出来事は一時の美談で、またたく間に風化してしまっている。そのような思いで講演を聞き始めたが、一瞬にして身体に電気が走る思いがした。

まず、「利他」と「利己」の境目は曖昧で、「メビウスの帯」のようだとのこと。確かに言い得て妙である。さらに「利他」は与えるものではなく、相手に受け取ってもらうことで成り立つということを、ご自身の実体験を通してお話しになった。「利他」はあくまでも与える側の意思や意識ではなく、我々自身が過去の様々な人やものから恵みを受けていることの“気づき”が「利他」の本質だということだ。

中島さんは政治学者あるが、なぜこのような宗教的考えに至ったかの経緯もうかがった。昨今の世情は新自由主義を標榜しているが、その広がりとともに格差と貧困が拡大している。それを解消するには、自由の代償としての自己努力や自己責任に重きを置く今の政治のやり方には限界があり、そこに「利他と他力」の視点を加える考えに至ったとのことだ。確かに卓見で、取り組んで実現したい提案だと思う。

一方、「利他」とか『他力』は仏教の教えと思われがちであるが、多くの先達がそのような考え方や生き方を述べた。その例として明治の哲学者、九鬼周造『偶然性の問題』で、「今の自分は自分の意思によるだけではなく偶然性が関与している。自分の生は授けられたものである」ということ。またインドのヒンディー語には「主格と与格」がある。昭和の哲学者、西田幾多郎や民芸家柳宗悦の「計らいを捨てたところに良い仕事や美がうまれる」ということ。料理家、土井善晴氏の「料理に人間の計らいが現れてはいけない。美味しいものを作るのではない、美味しさはやって来るもの」というお話。「一汁一菜は南無阿弥陀仏」というお話は利他、他力の極め付きの考えだと感じ入った。

最後に「聖道の慈悲」と「浄土の慈悲」について触れて、利他と他力は阿弥陀如来の本願であるとの親鸞聖人のみ教えで講話を結ばれた。

素晴らしい講演で私のみならず、多くのお集まりになった人たちの心を開く機会となったことだろう。アンケートの一つに「偶然通りすがりで知って入場しました。この機会を与えていただいたことが正に他力なのでしょう」とあった。

（太田 清史 記）